

ブルーシート張り活躍



活動への思いを語る赤池代表

災害ボランティア「愛・知・人」

独自施工法 風に強く

9月の台風15号、10月の台風19号と、2度にわたって大きな被害を受けた千葉県木更津市で、春日井市の災害ボランティア団体「愛・知・人」が、被災家屋の屋根にブルーシートを張るボランティアを続けている。2016年4月の熊本地震以降、取り組んできたシート張りの施工法は高く評価されている。

「愛・知・人」の設立は11年4月。東日本大震災で津波に襲われた被災地の様子をテレビで見た赤池博美代表(49)がいてもたっても

いられず、趣味のアウトドア仲間15人で宮城県に向かい、ボランティア活動を始めたのが始まりだった。

その後も、紀伊水害(11年9月)、関東・東北豪雨(15年9月)など、全国で活動することになり、輪が広がり、メンバーは現在約750人まで増えている。

ブルーシート張りに取り組むようになったのは、熊本地震の際、雨漏りに悩む被災者に相談されたのがきっかけ。



被災した家屋の屋根にブルーシートを張るメンバーら(9月28日、木更津市で)＝「愛・知・人」提供

「自分の家なら、誰もが必死になってやるはず」と引き受けた。

試行錯誤するうちに、18年9月の台風21号の際、ボランティア活動をした大阪府岸和田市で、「ブルーシートキャッチャー」と名付けた施工法を考案した。通常、シートの端は土のうで押さえるのだが、この施工法では、瓦にひっかけて木材に、シート端の木材を上から固定する。土のうで押さえるより、強風にも耐えるのが利点。今年の台風15号の被災地・木更津市ではすべてのシートが台風19号にも耐えたという。

シート張りに熟練した人は少なく、自衛隊や消防団員向けにもノウハウを伝えている。「台風15号の後、自衛隊、消防などが張ったシートは、台風19号でほとんどやり直さなければならなかった。事前に連携ができていれば、災害復旧は加速させられるはず」と赤池代表は力を込める。

光と愛の事業団 活動資金を助成

「愛・知・人」は今年度、読売光と愛の事業団による「災害ボランティア登録団体制度」の助成団体に選ばれた。今年度から始めたもので、大規模災害時の初動対応に必要な資金を助成する制度だ。

赤池代表は「これからも被災した方々の気持ちを、マイナスからゼロに持っていく役割を果たしていきたい」と話している。

被災者救援に

100万円を寄付

塗料商社の元会長
自動車塗料商社「江口蔵」

料開放

22日の「伴う慶祝事は同日に限

倒木撤去 被災地手助け



民家の倒木を切断する会員ら（千葉県木更津市で）＝熊野レストレーション提供

熊野の社団法人

チェーンソーの腕生かす

台風で被災した千葉県木更津市と長野市で、熊野市の一般社団法人「熊野レストレーション」が復旧作業に取り組んだ。チェーンソーや重機を扱えるメンバーが多く、倒木の切断・撤去などに大きな力を発揮した。
(根岸詠子)

9月24、28日、台風15号で被災した木更津市へ、全国にいる会員が駆けつけた。現地では倒木が道路を塞ぎ、通行止めになっていた。延べ35人が倒木をチェーンソーで切断し、パワ

ショベルで撤去したほか、住宅や神社など7か所でも倒木を撤去した。倒木が家屋にもたれかかって復旧作業が進まない住宅もあり、住人らから感謝されたという。

さらに、今月26、27日には台風19号で被災した長野市へ赴いた。会員ら10人が道路に山積みされた災害ゴミを集積所へ運ぶため、重機を使ってダンンプカーに載せていった。住宅の床下にたまった泥を運び出す作業

も手伝った。

法人の設立は2012年。11年9月の紀伊半島大水害の際、駆け付けたボランティアがチェーンソーで倒木を切り、撤去するなど復旧作業を手助けた。その時のメンバーを中心に活動を始めたのがきっかけだ。会員は全国各地に約40人おり、災害時には各自で被災地に集まる。

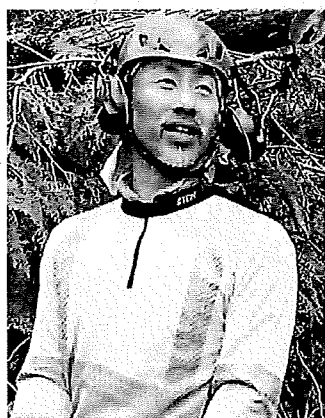
当時、ボランティアの協力を呼びかけたのは代表理事の端無也さん(47)。熊野市出身で、阪神・淡路大震災などで災害ボランティアを経験している。法人では、手入れの行き届いた山林を増やすことが土砂崩れなどの被害を防ぐことにつながるとして、日頃は県内外で森林や里山の保全活動に携わり、市内では農業も手がけている。「被災地では困っている声を出せない人もいる」とも話している。

「熊野レストレーション」は今年度、読売光と愛の事業団による「災害ボランティア登録団体制度」の助成対象に選ばれた。同制度は今年度からで、大規模災害時の初動対応に必要な資金を助成する。

鳥羽海保

船では救命胴衣を漁業者らに呼びかけ、操業中の船からの転落事故に備え、鳥羽海上保安部は鳥羽市の離島・菅島で、漁業者らにライフジャケット(救命胴衣)の着用を呼びかけた。

全国漁船安全操業推進月



代表理事の端無さん

来月、両陛下来県

県は28日、天皇陛下の即位をお祝いするため、伝統的工芸品「鈴鹿墨」を献上すると発表した。献上する作品は、漆工芸技法の一つ蒔絵により、墨の表面に縁起物の中でも特に格式の高いとされる鳳凰が描かれている。1丁を11月中に献上する。

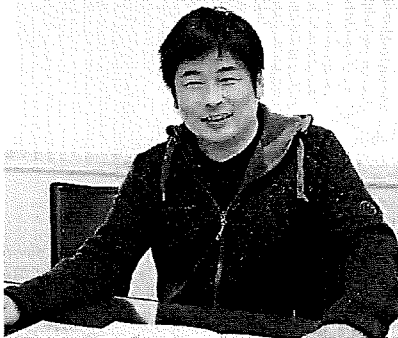
鈴木英敬知事は「お祝いの気持ちを表し



光と愛「災害ボランティア」

築地の社団法人に助成

災害時の初動対応に力を入れているボランティア団体の一般社団法人「DPLS-JAPAN」（中央区築地）が、読売光と愛の事業団が今年度から始めた「災害ボランティア登録制度」の助成先に決まった。代表理事の土屋和也さん(44)は「すばやい支援を続け、被災地で一人でも多くの人の力になりたい」と話している。



「支援が必要なところにすぐに駆けつけて、力になりたい」と話すDPLS-JAPAN代表理事の土屋さん（中央区築地で）

迅速な初動対応復旧に力

「DPLS-JAPAN」は、20〜40歳が集まって地域貢献の活動を行う青年会議所（JC）のOBを中心とした。2016年12月に結成された。東日本大震災でJCメンバーとしてボランティアに参加した、東北から九州までの会員25人が活動の中心を担う。

災害が起こると、会員たちはまず、それぞれの地元JCの仲間たちとともに、被災地支援に向かう。土のう袋やスコップ、地面を掘削する「バックホー」などの重機やトラックなどを提供し、がれきの撤去や片付けなど、復旧作業をすばや

台風で断水したため、給水車で生活用水を提供するDPLS-JAPANや青年会議所の会員たち（10月、福島県いわき市で）＝土屋さん提供

く始められるように支援する。被災地のJCの人脈を生かし、地元の役所などと円滑な連携を取りながら、ボランティアセンターの運営も行う。

会員たちは、今秋の台風で大きな被害を受けた千葉県や福島県などへも駆けつけた。土屋さんも会員やJCの仲間と断水が続く同県いわき市に入り、給水車で生活用水を提供して回った。土屋さんは「困っている人がいれば役に立ちたい」という思いで災害支援を行ってきた」と思いを語る。

読売光と愛の事業団が今年度から開始した「災害ボランティア登録制度」では、大規模災害が発生した直後に被災地に駆けつけた時点で必要な資金を提供する。土屋さんは「活動後ではなく、活動するすべにもらえる助成はありがたい。今後も災害が起こればいち早く被災地に入り、被災した地域の人々がすばやく復旧に取り組めるよう後押しをしたい」と気を引き締めた。

都オリジナル婚姻届 夫婦エピソード募集
 都は、都内の街並みをあしらった都独自の婚姻届を作成する。イラストとして